

東歌・防人歌の色彩

伊原昭

一

私は数年来、和歌を対象としてその中に詠みこまれている色彩語によつて表現されている色彩のあり方を眺めて来たのであるが、いつも、奈良期・平安期・鎌倉期といったように、縦の線に於いて、いわば、歴史的に時の流れに従つてその様相の移り変りを考えて来たのであつた。従つて、万葉集も、後世の八代集や、又、十三代集などに対する一個の、奈良期を代表する集として、色彩の様相の大概を擷んでこれらに対比せしめる一つの素材としたにすぎなかつた。しかし、四五〇年にもわたる長い作歌期間と、種々な歌体と、各地に散在する有名・無名の様々な階層の作者と、といったような、後世の集にはみられぬ幅の広さを持ち、又、四五〇〇余首にも及ぶ龐大な作品を擁している万葉集であるから、たとえ、色彩の面からながめるだけだとしても、単に全体を擷んで「云々である」とは云い切れない筈であるし、その上、これが後世の集のように、狭

い枠にはめられ統制された作品群ではなく、各々の作者達によつて、何の制約も受けずに生の衝迫として歌い上げられたものであるだけに色彩の様相も亦、複雑であろうと思われる。そこで今後、私はあらためて、万葉集を一つのものとして捉えるのではなく細部にわたつて調査して色彩の種々相を把握したく思うのである。その手始めとして、東歌と防人の歌をしらべてみたのでこれらについてまことに雑薄なものではあるが、一往御報告してみたいと思う。

二

万葉集の中には、約七一五語ほどの色彩語が見出されるが、これは、平均六・三首の歌の中に一語の色彩語がよまれているという割合になる。これを各巻別に見ると、第1表の通りであるが、このうち(註1)巻十四は十二・五首に対して一色彩語、巻二十は十・二首に一色彩語といった割合で、他の巻々にくらべると色彩語数の割合が非常に少ないと云える。巻十四は東歌という名のもとに集められている巻

であり、巻二十は防人歌九三首を含む巻である。この巻二十の中から防人歌だけをとつて調べてみると九三首の中には僅か六語の色彩語しかなく、十五・五首に一語という割合になつてゐる。そして、残りの防人歌でない一三一首には、十六語の色彩語が含まれており、これは八・二首に対して、一語の割合になるわけで、これに比べれば防人歌の方は約1/2の色彩語しか持つてゐないということになる。であるから、巻二十の色彩語数の率の低さは防人歌を含む為だと云えるように思う。このように東歌の巻十四、約四割の防人歌を含む巻二十は各巻の中で特に色彩語が少ないと云うことが出来るのである。防人歌は高木博士^(註2)も、又、高崎正秀氏等も^(註3)防人歌は新東歌と呼ばれるべき性格のものだと云われているが、東の国に深い関係をもつという点で共通な防人歌・東歌の歌群に、このように色彩語が少ないと云えそうで、と云うのはもう一つ別の調査として、第Ⅱ表^(註4)のようなグループ別の歌群の調査をしたみたのだが、やはり、東歌と防人歌の歌群は、他の歌群の1/2或は1/3程度の割合の色彩語しか持つてゐないというところが見出されたのである。このように第Ⅰ表・第Ⅱ表のような調査をしてみると両者はまことに色彩語の少い歌群だと云うことができるのである。

三

それではどのような色彩語が東歌、防人歌の両歌群に含まれてい

るか。その種類についてしらべてみると、第一に云えることは種類が少いと云うことで、万葉集には全体で約二十八種の色彩語がみられるのに、防人歌には、白・青・赤の三種だけである。それもいわゆる原色のみで、青や白は普通にいわれる時代区分の万葉の第一期迄^(註5)に、赤は第二期^(註7)までにはすでに見えてゐるといつたような古いもののみであり、又、万葉以外でも白は神代記、景行紀、常陸風土記の歌謡等に見えており、赤も白と同様、神代記、神代紀、播磨風土記等の歌謡の中に見え、青も亦、赤と同様のものに見えてゐるといつたように割合古くから用い慣らされた色ばかりである。東歌^(註8)の方は、白・青・赤・紫・丹・もみち・榛摺・こなきの花摺・まそほの九種類で、防人歌よりはやや幅が広いが、それにしてもやはり白・青・赤が用例が多く主となつてゐる。そして、紫などは紫色の材料としての紫草をさしているにすぎず、集中他の歌にみられるあの美しい紫色のものではないし、丹にしても「丹生」という地名であつて、丹の色そのものではない。結局こうしてみると、防人歌と同じ古い普遍的な原色と、あと、もみち、榛摺、こなきの花摺、まそほのような僅かな植物染料・顔料の如きものが見えるのにすぎないのだが、もみちも、榛も、すでに万葉第一期には見えているものであるし、まそほにしても第二期には見えてゐるといつたように、やはりこれらも早くから普遍化されたありきたりのものを採り上げてゐるのにすぎないと云える。ただ、こなきの花摺の色が東歌だけに

見られる唯一の新しい色名(襷染用と)だと云えるだけである。このように、色彩語の種類(しての)の面から考えてみても、防人歌は集全体の色彩語の種類数の一割、東歌は四割といつたような貧しい状態であり、且つ、古い、同時に万葉第四期あたりまで続けて多くよまれている(註9)ありふれた、主として原色といつたような概念的な色名ばかりで、防人歌或は東歌の特性のうかがえる新しい趣向の色名は全く無いといつてよい。

四

それでは、これらの色彩語によつて修飾されている事物や現象にどのようなものがあつたろうか。防人歌には、白では玉と浪、青では雲、赤では駒が修飾されている。これらを見ると、白玉も、白波も、青雲も、赤駒も万葉第一期・第二期、或は神代記の歌謡・日本書紀の童謡等に見え、どれもすでに歌によみこまれている一般化された普遍的なものばかりである。新しい色でなくとも、何か変化にとんだ新しい物象がそれによつて修飾されているということが見出されれば、防人歌群にふさわしい、いつてみれば防人歌らしい特色があると思うのだが、そのようなものは何も無い。東歌の方も同様で、白では浪、雲、かや、袴袖、青では雲、嶺、柳、赤では駒といつたようなもの、又、もみち、紫草その他、榛やこなぎの花では衣が修飾されている。まそほは心情を表現している。白浪、青雲、赤

駒等は防人歌で述べた通りであるし、その他、白雲、白たへの袖、青柳、もみち、紫草、袴摺の衣など、どれもごく詠み慣らされた平凡なものであつて、すでに万葉第二期あたりまでには皆出揃い、且つ、万葉第四期あたりまで続けてずつと使ひならされたものばかりなのである。ただ青柳だけは、万葉第三期からあらわれはじめののだが、これとてもあらわれると同時に非常に多くよまればはじめるのだれ一般化されたもので特殊のものとは云えない。であるから東歌に固有というようなものは殆んどないと云える。ただ目新しいのは、こなぎ摺の衣と、根白たかがやと、まそほによる心情の表現とであろう。このように色による物象は、防人歌では四種、東歌では十四種といつたような少なさで、たとえ色彩語数が少くともその種類が多くあるとか、或は両者が少くとも種々の物象が修飾されているといふことも他にはあり得るのに、両歌群とも色による物象の種類も亦、まことに貧しく、両歌群の個性のうかがえるものなど殆んどない。

五

それでは防人歌や東歌の色彩語は歌の中で一体どのような状態で存在していたらうか。防人歌の方を見ると、色彩語のすべてが、すべてなどいつても僅か四種にすぎないのだが、それらが本来は形容詞であるにかかわらず、全く活用しておらず、語幹だけが修飾

される物象と熟合し、白^二玉、青^二雲、赤^二駒のように体言化してしまつてゐる。それで色彩語の働きは止められ、独立性を失ひ、物象が主体となつて色彩語はその一部分或はその附屬物の如くになつてしまつてゐる。熟合形になるのは古代形容詞の大特色とされては(註12)いるが、それにしても、両歌群以外の集中の歌には活用してゐるものがないではなく、両歌群に共通にある白・青・赤を例にとつても、白には「白く置く」(八七)「白くなるまで」(七一)「白きは」(三二四)「白く置く露」(四三〇)等があり、青も「青きは」(六一)「か青なる」(二二一三)「青く生ふる」(九一八)「青き蓋」(〇四四)赤にも、「赤き心」(六五)等があるので、防人歌の場合は全く色彩語は活用してゐない。東歌の場合も亦同様、語幹だけが物象と熟合し、その働きは封ぜられてゐる。ただ、もみちだけは「もみつ」として動的によまれて働いてゐるが、これも集中、多くの例があるので、東歌のみの特異な現象ではない。色彩語が歌の中に大きな場を占めるということが出来ないという事は、このようにこれらの語が非活動的であることからくるが、更に又、東歌には序詞の中に詠みこまれていて歌の主旨を飾るだけで、主旨そのものの構成に直接役立っていない場合が多いということからも云えることなのである。さらに又、「白雲の」絶えにし妹(一三五)「青雲の」出で来我妹子(一三五)のような枕詞の中に含まれる色彩語もあつて、いづれにしても、色彩語が歌そのものに対して重要欠くべからざるものになつてい

る、色そのものをよむことが歌の目的である、或は歌が色によつて生かされてゐるといふような場合は、東歌においてはこのように全くないと云つてよい。だから、歌の中で、ある色彩語とある色彩語とを対照させたり照応させたりしながら歌を美的に表現するとか、ある色彩語を使つてゐる種の気分、情趣といつたようなものを自然に滲み出させるといふようなことが集中の他の歌群には見られるのに、防人歌や東歌には全くない。例えば防人歌や東歌では赤駒をよんでいるのも

赤駒を打ちてさ緒びき心びきいかなる青なかわがり来むといふ

(一四三三三〇)

赤駒を山野にはかし取りかにて多摩の横山徒歩ゆかやらむ

(二〇四四一七)

といつたように、赤に対して別に何の色彩語も対応させていないのだが、東歌・防人歌以外の歌には

赤駒を既に立て黒駒を既に立てて……

(一三三七〇)

のように赤と黒とを同じ駒に於いて対比させた歌がある。又、両歌群では青雲も

汝が母にこられ我は行く青雲の出で来我妹子相見て行かむ

(一四三五一七)

大君の命かしこみ青雲のとのびく山を越よて来のかも

(二〇四四〇三)

といったように、単に、雲の青さだけをよみ、これに対して何も他の色彩を添えていない。しかし、他には

白雲の たなびく国の 青雲の 向伏す国の…… (13三三二九)

のような白と青とを対照させた雲もある。東歌では青嶺ろにたなびく雲のいさよひに物をぞ思ふ年のこの頃

(14三五二一)

一嶺ろに言はるものから青嶺ろにいさよふ雲のよそり妻はも

(14三五二二)

のように山と雲の関係も単に、山の青さだけなのだが、他の歌群には青山の嶺の白雲朝に日に常に見れどもめづらし吾が君

(3三七七)

というように青さと白さと関係つけて美しく表現している例もある。東歌に見える

子持山若楓のもみつまで寝もと我は思ふ汝はあどか思ふ

(14三四九八)

白たへの衣の袖をまくらがよ海人漕ぎ来見ゆ波立つなゆめ

(14三四四九)

も、もみちの色や、衣の白さは、各々、単独によまれ、それに照応する色の添加ということがみられないのだが、集中、他には

わが背子が白妙衣往き触ればにはひぬべくもみつ山かも

(10二一九)

のように、白さと、もみちの色とが一首の中で互に照応しつつ美しく生かされている例がみられる。又、柳の青さを例にしても東歌では

うらもなくわが行く道に青柳のはりて立てれば物思ひ出つも

(14三四四三)

青楊のはらる川門に汝を待つと清水は汲まず立処平らすも

(14三五四六)

というように青さに対する色彩は何もないが、他には

桃の花 紅色に にほひたる 面わのうちち 青柳の 細き眉根
を 笑みまがり…… (19四一九二)

のように紅と対照させている例もあり、このように色彩に特に関心を持ち、技巧的に色を対照させながら詠んでいる場合も東歌や防人歌以外の歌にはいくつもある。これに反して防人歌も、東歌も、このような例はみられず、一首の中で色と色とを対応させるといったような、色の表現に対する特別な関心、又は技巧は全くないと云つてよい。さらに又、防人歌・東歌に見える色彩語はそれ自身を直接説明してくれる言葉を全く持たず孤立していると云える。それは例えば、両者に共通に見られる青・白・赤等の色彩語を採り上げてみても、両歌群以外には、「水鳥の青葉の山」(8一五)「水鳥の鴨の羽の色」(9四四)のように、水鳥のような青、鴨の羽の色のような青といったように、説明のつけられている青、「降る雪の白髪」(9一七三

(二)「柶綱の白ひげ」(20四四)のように、雪によつて、或は柶でつくつた綱によつてその色を説明されている白、「紅の赤裳」(五〇三)「はねず色の赤裳」(八二二七)のように紅、或は、はねず色で説明されている赤色等が見えている。しかし、防人歌にも亦、東歌にも、このような色についての説明の言葉をもつている青も白も赤もない。つまり、両歌群では各自の示す色彩をいかにして人に解らせようとするかと云う意志は勿論なさそうであるし、同時に色彩語の占める場というものが歌の中で他の歌群にみられる、今あげた例のように、広く且つ重んじられているということもなさそうで、色というものが防人歌や東歌に於いては、まことに小さな存在でしかなかつたということがわかるように思われるのである。

六

集中には、色彩に対して様々な情感を抱いていたことが推測される歌が多く見出されるのであるが、防人歌や東歌にはそのようなのは殆んど無い。両者に共通の青・白・赤をみても、又東歌のみみち、榛摺、紫、丹等の色についても、それらを詠みこんでいる集中の他の歌々を見ると、色そのものに対して直接にある種の情感を表現したり、或は間接にしてもそれに対する情感が推測されるように表現していたりというように各々の色が生きていて、彼等がその色を持つ事物に対して、或は、その色が一部となつて構成されている

情景や事柄に対して、ある種の情感を抱いていたらしいという事が推測される歌々が多く見出される。例えば、両歌群に共通の青という色を例にとつてみると、両歌群以外の集中の歌には、

青山の嶺の白雲朝に日に常に見れどもめづらし吾が君(3三七)
 のような清新な美の情感

梅の花咲きたる苑の青柳を護にしつつ遊び暮さな (5八二五)
 のような好愛の情感

人魂のさ青なる君がただひとりあへりし雨夜の葉非左思所念 (16三八八九)

の如き恐怖の感、というように青という色をとおして種々の情感が抱かれていたらしいと考えることの出来る例があるのだが、防人歌や東歌の青には、どのような情感が抱かれていたかを推測することは全く出来ない。ただ、防人歌の

大君の命かしこみ青雲のとのびく山を越よて来のかも

(20四四〇三)

くらいが、雲の青さを通して悠遠な情感を汲みとつていたらしいことが想像される例なのだが、これにしても、集中他には、

白雲の たなびく国の 青雲の 向伏す国の……

(13三三二九)

等があり、雲の青さに対する割合一般的な情感で、防人歌にみられる特異の情感ではなく、祝詞などにもこのような情感が青雲に対し

で多く見えているところを考えれば上代の人達が感じとつた普遍的な情感だつたようで特殊のものとは云えない。さらに、白に対しても東歌・防人歌以外の集中の歌には、

隠沼の下ゆ恋ひあまり白波のいちしろく出でぬ人の知るべく

(12三三〇・三・一七三九三三)

のように鮮明な情感

……大殿を ぶりさけ見れば 白たへに 飾り奉りて……

(18三三三三)

のように清浄・神聖な情感

……この箱を 開きて見れば……少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世べに たなびきぬれば……

(9一七四〇)

のように神秘の情感

伊勢の海の沖つ白浪花にもが包みて妹が家つとにせむ(3三〇六)のように限らない好愛の情感

初瀬川白木綿花に落ちたぎつ瀬をさやけみと見に來し吾を

(7二〇七)

のように清澄な情感

はろばろに思ほゆるかも白雲の千重に隔てる筑紫の国は

(8八六六)

の如く悠遠な情感というように、様々な物象の白さや、それを含む光景・事柄に対して種々の情感を抱いていたらしいことが推量出来

る例が多いのであるが、防人歌や東歌には、これと云つた情感を抱いていたらしい様子はない。ただ白玉に対しては、防人歌に、

父母え齋ひて待たね筑紫なる水漬く白玉取りて来までに

(20四三四〇)

白玉を手にとり持して見るのすも家なる妹をまた見てももや

(20四四一五)

というのがあり、好愛の情が滲み出ているのを見ることが出来るが、これとても集中には、

妹がため吾玉求む沖べなる白玉寄せ來沖つ白浪

(9一六六七)

白玉の見がほし君を見ず久にひなにし居れば生けるともなし

(19四一七〇)

世の人の 貴み願ふ 七種の 宝も我は 何せむに 我が中の 生れ出でたる 白玉の わが子古日は……

(5九〇四)

の例のように、白玉を家なる愛する者達に土産にしたい、又白玉を最愛の妹や子にたとえるといつたような好愛の情をもつていると考えられる歌が割合多くあつて、防人のこの白玉に対する情感も、いわばこれに類する平凡なもので彼ら独特のものだつたとは思えない。又、赤に対しても東歌や防人歌以外の集中の歌には、

山吹のにはへる妹がはねず色の赤裳の姿夢に見えつつ

(11二七八六)

のように華麗な美しい情感を抱いていたように推測せられるのが見られるものがある。しかし防人歌や東歌の赤からは、どのような情感を彼等が抱いていたかなどということは全く推測するに困難である。さらに東歌に見える紫にも、他の歌群には、

紫草のにはへる妹を惜くあらば人妻故にわれ恋ひめやも(121)
 のような優婉な情感

紫のまたらの縷はなやかに今日見し人に後恋ひむかも(122)
 のような華麗な情感を抱いていたらしいことが見られるのだが、東歌には草としての紫をよんでいるのが一例で、それからは紫色に対する情感は全く見られない。又もみちに対しても、集中両歌群以外には

もみち葉を散らまく惜しみ手折り来て今夜かざしつ何か思はむ
 (81586)

というような、この彩に、美の、又愛好の情をもつたことがはつきりつかめる例がある。しかし東歌のは、若楓がもみちになるまでと云うのであつて、期間を示す手段として用いられているにすぎず、これに対して抱いている情感は何も汲みとることは出来ない。さらに又、東歌にみえる榛摺の衣の色も、著き寄るというために使われているので、この染色に対する感情の動きはみられない。しかし、集中には、

時ならぬ班の衣著欲しきか島の榛原時にあらねども(71260)

などのように好愛の情を示している例をみることが出来る。丹などはまして、東歌では丹生という地名としてよまれているので何らの情感をも示していないのは云うまでもない。しかし集中には、

…：菟田道の 丘辺の路に 丹つつじの 蕪はむ時の…
 (6972)

の例のように華やかな情感を抱いていることの明らかな歌々がある。このように色彩に対して、或は、その色彩で修飾されている物象を通して、又は、その色を含む情景や事柄等を通して、何等かの情感を抱いていたとはかられるような歌は、東歌や防人歌以外の集中の歌には色々あるにかかわらず両歌群にはまことに稀で、それがたまたま汲みとられるようなものがあつても、全く平凡な普遍的なものばかりで、両歌群独特のもの、特異のものは殆んど見出されないと云うことが出来る。

七

防人歌はその内容からみて相聞的な歌が多いし、又東歌も相聞が大部分を占めている。そこで特に、集中の相聞歌と色彩語の關係をみると、鮮やかな目立つ色彩語をかりて秘めた恋情の態度にあらわれてしまうことを表現する場合、種々の植物染料によつて彩られた衣の色に托して恋人を表わしている場合、美しい色名を以つて相手を美的に描写する場合、褪せしやすい色彩を使つて愛心を示す場合

などがみられる。例えば

言ふことの恐き国ぞ紅の色にな出でそ思ひ死ぬとも (4六八三)

さ丹つらふ色には出でね少くも心のうちわが思はなくに

(11二五三)

白細砂み津の黄土の色に出でて言はなくのみぞわが恋ふらくは

(11二七五)

紫のわが下紐の色に出でず恋ひかも瘦せむあふよしを無み

(12二九七)

等のように、集中には、紅や、丹、黄土、紫といったような鮮麗な目立つ色を恋の心情表現に使い、歌を相聞歌らしく美しく生かしている例が多い。ところが、同じ相聞歌を多くもつ防人歌にはこのような表現は全くなく、東歌には僅かに

真金吹く丹生の真朱の色に出で言はなくのぞみ我が恋ふらくは

(14三五六)

がみられるだけである。又、

紅の八塩の衣朝朝ななれはずれどもいやめづらしも (11二六三)

託馬野に生ふる紫草きぬに染め未だも著すて色に出にけり

(3三九五)

紅はうつろふものぞ様のなれにし衣になほしかめやも

(13四一〇九)

等の例にみられるように、東歌・防人歌以外の歌には、紅や、紫

や、椽の衣の色を譬喩に使つて恋人や妻を表わしているものが多くみられるが、これも防人歌には全然みられないし、東歌には

伊香保ろのそひの榛原わが衣に著きよらしもよひたへと思へば

(14三四三五)

苗代の子水葱が花を衣に摺り馴るまにまにあぜか愛しけ

(14三五七)

というのが僅かに見られるだけで、これも衣の色そのものを譬喩に使おうとしているのではないように思う。さらに、集中には「赤らひく膚」(11二二三)「あから引く色妙し子」(91九九)「紫草のにはほへる妹」(11二)「さにつらふ妹」(11一九)のように、美的な色を以つて相手を美しく表現しているのも多くみられるが、このような表現も亦、防人歌にも東歌にも全く見られない。又、「はねず色のうつろひ易きわが心」(54六)「はねず色の移ろひ易き心」(12三〇)「ももぞめの浅らの衣浅らかに思ひて……」(71〇)などのように、心の状態を色彩によつて表現しているものも集中には見られるのだが、こういった例も両歌群には全く見られないのである。このように、相聞歌と色彩語との関係は、集中、種々な技法をもつてたくみに關聯づけられているのに、今見て来た通り防人歌はなお更のこと、東歌にも殆んどこれらの結びつきというものは無い。

以上述べて来たように、東歌や防人歌という、東の国に深い関聯のある歌群にみられる色彩語は、その数量の割合は極めて僅少であり、かつ種類も僅かである上に、それが又、すべて古くから続つてづつと集中に多くみられるごくありふれたもので、原色を主とした、いわば概念的・観念的・類型的なものばかりで、少しも現実的な生新な具象的・個性的な色彩語は含まれていなかった。そして、それらの色彩語を伴う諸物象は、これ又何の特色もない普遍的なものばかりであつた。又、色彩語は活動性を封じられて歌の中でまことに小さな重要なわざを存在でしかなかつた。作者達^(衆民)の色彩に対する感覚は極めて鈍く、これに対して抱く情感もうすく、見たままのナマの色彩を使つて表現しようという意欲はなく、色彩の表現技法に対しても全く無関心であつたように推測されるのである。

ここで、私は、東歌や防人歌の特質について、諸学者の述べていられる見解をあげてみる。「東歌の表現はまた一面に於いて、具象的であり、感覚的であり、現実的であつて、観念的でない。……東国庶民の特殊な生活や自然観察がかなり豊富に現れてゐる。」^(註13)「東歌の風土的関聯の密度の深さは、さらに、試みに植物の一例をあげて見ても、他の集団にない、いはぬづら・たはみづら・くくみら・つづら・うけら・おほめぐさ・かへるで・かづのき等の語を見、夫々の植物生態が心情表出とからんで表はされてゐるし、また試みに、筑波の歌を見れば、わづか十一首をもつて、筑波山を中心に、北の

葦穂山・嶺にかかる霞と月・鶯の声・山の鼻・嶺より落ちる川・雪・木の間をとび立つ鳥・山麓の道・山の守部・乾した布等これらの大道具・小道具を契機としてこの辺の農村の男女が体験したであらう各種の心情は、女の吐息・男の常陸言葉に表出され、山にいだかれ、山と共に暮す古代農村人の土に埋れた生活の声をきくのである。かういふ地盤に立つ防人の歌に、土に埋れ实地に即した心情の、新鮮ないぶきを聞くのは当然であつて、^(註14)「東歌には東国人の生活が極めて如実に詠まれてゐると云ふ」^(註15)「東歌はこの序歌^(〇四)にも表れたやうに、一層実生活に根ざし、全体としても民俗を語る歌が多い。」^(註16)「……生活民謡歌が、意外に多数にのぼる事に、先づ注意を惹かれる。……特に、天然自然の動植物を其のまま取つて生きる為の用物とする有様が……」「未開人が譬喩をとる時、観念的に高貴なものや、芸術的に美化されたものを想起する代りに、現実の日常生活の中の事物を、……撰りとつてくる事は、当然の帰結でなくてはならぬ」^(註17)「土地固有の色彩がありありと出現してゐる歌がある。而して、唯今の場合「その土地」といふのはつまり東国のことだからおのづから東国特有の地方色がうんと濃厚に露出してゐるといふことになる。」「材料が荒々しく新鮮である。中央歌壇などまるで知らない人の眼で、生新に捉へ来つた題材のみである。」^(註18)「しかし都人の作と異なるのはAやBの内容で、農村の生活や自然の中の新鮮で活き活きとした素材が用いられ、極めて動的な生活感

覺が、後句の陳思部と融合して生彩を放つてゐること、……」(註19)「防人歌は……農民生活の生きた素材に即することによつて、素朴ながらも生き生きとした、従つて変化に富んだ生活感情を歌つてゐる点は……しかしそれはむしろ東歌において、一層光彩を放つてゐるのであつて、……」(註20)「しかし、また、一方、中央の言語とは別途な発達と展開によつて生れたあたらしい語や形態は、地方の農村の鄙びたひびきを、それ相應の情趣の陪音を伴つたかたちで、中央の耳に伝へたのである。」(註21)「東歌が素材的にも、また言語的にも、更に文学的にも他の巻々とは全く色彩を異にする特異な世界を形づくつてゐることから見て……」(註22)「また一例として素材論的に歌中の植物について見ても、……万葉歌人が最も愛好したと思はれる萩、……山吹等その美を愛でられた花が一首も東歌にあらはれず、それに反してうけらが花、いはあづら、おほあぐさ、かづの木など一般的な美的範疇の外にある東歌特有のものが相当多く見られるといふことなどからも、……」(註23)「……この場合にも序詞の位置とその意味とは平凡のものではなく、短くはあるがその内部に包含せしめた自然物は、地方色を漂はせるとともに一種の新鮮性をもたらしてゐるのを否むことはできない。」(註24)「……平常の生活にあつて触目の植物をそのままとらへ來つて歌の中に生かしたであらうことを、……」(註25)「武蔵の国の歌は……これを基盤として究明するも、そのほとんどが序詞を所有し、それらは理想的の形態といふわけにはゆかないが、民謡

を生んだ国土の風物がさまざま実想を展出して、独自の環境を作り、……」(註26)「……(序詞は)ただ、がむしやらに風物を織り込み、強引に発想して行く。」(註27)「植物では野生のものが多し。……珍しい草の名が多いことは……総体にかなり広く日常生活に身近な種々の物象を採入れてはいるが、……」(註28)「……それにしても我々は東歌制作に与つた地方の人たちが序詞に異常なほど興味を抱き、……多くの物象を採り入れ、新趣向を求めてやまなかつたところの逞しい意欲と情熱には驚かずには居られない。」(註29)「このように多くの学者達が口を揃えて東という地に於ける彼等が、その日常生活の他には見られぬ卑近な物を様々にとり入れてよんだことにより、東歌や防人歌がまことに生き生きとして変化にとんだ現実的、具象的な性格をもつ異色ある作品群となつてゐるのだと云われている。それならば、又当然、色彩等についてもそれにつれて彼等の周囲にみられる東国特有のナマな物象の色が具体的に生まれ、変化にとんだ生彩ある色名が創造されるだろうことが予想されるのであるが、事実はそのとは全く反対にこれら両歌群にあらわれる色彩語の様相は極めて貧しく、又、万葉のどの期にも、何所でも、又、誰によつても詠まれ得るようなまことに変化に乏しい陳腐な普遍的・類型的なものばかりで、何等、東の国の特色ある世界をうかがい得るような特異性をもつた個性的なものは見られなかつたのである。特異なものであるとすでに定評づけられている東歌や防人歌の内部に、このような全く反対

の矛盾した一面の存することは注意すべき事ではないかと思う。

九

最後に、結論として当然この矛盾を解くべきであらうが、この矛盾はこれを単に東歌や防人歌だけについて捉えることは正しいとは云えないように思う。私は、今、色彩を一つの文学的構造として、日本文学の全分野にわたつて眺めてみようと思つてゐる。そこへ一つの道程として、特に万葉集・八代集・十三代集といった和歌の世界を調査しつつある者である。従つて少くとも、この分野における調査が一段落ついた時に、云い換えればもう少し広い見通しがつくようになった時、あらためてこの矛盾を解くべきだと考へてゐる。その意味で、この小稿の結論は私の研究がその段階に至る迄持ちこざるべきで、ここでは、こういう事実があつたということだけを御報告するにとどめたいと思う。(小稿は、六月二十一日上代文学会の研究會)で発表したもの修正したものである)

なお発表の際、「うけらが花」について御質問があつたが、これは物に摺りつけて色が出る、或は物を染め得る植物であるとは歌から推量できないので、色彩語として扱わなかつた。又、「防人歌は冬の期につくられたから色彩語が少いのではないか」という御質問を受けたが、同じ時期に、家持が防人に関連してつくつてゐる歌には、色彩語の数の割合が三・八首に一語という多数であるので、そのようには一概に云えないと思う。

(註一)
第I表

巻名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
總歌数	84	150	252	309	114	160	330	246	148	539	497	383	127
色彩語数	21	23	38	33	17	25	65	47	34	86	50	45	44
一色彩語に対する歌数	4	6.5	6.6	9	6.7	6.4	5.4	5.2	4.4	6.3	9.9	8.5	2.9

14	15	16	17	18	19	20	總計
238	208	104	142	107	154	224	防人歌 93
19	32	33	35	12	34	22	4536
12.5	6.5	3.1	4.1	8.9	4.5	10.2	8.2
							15.5
							6.3

① 總歌数は新編新訂万葉集(佐佐木信綱編 岩波書店 昭和29.9)によつた。

(註二) 「二」の属子(万葉集大成12 平凡社 昭和38・11)

(註三) 「万葉集」を「防人歌」(國文學 一三三)

(註四)

第II表

グロリアを①	作者未詳の歌	作者時代不名の歌②	作者時代分明の歌③	歌集(和本人撰歌集・田辺稻原呂之歌集・空金村歌集・高麗虫原呂歌集)の歌	防人歌	東歌
總歌数	203	1571	1904④	451	99⑤	232⑥
色彩語数	35	262	321	66	6	19
一色彩語に対する歌数	5.8	6.0	5.9	6.8	16.5	12.2

- ① 作者別年代別万葉集(天授久孝・森本治吉編 新編社、昭和16.10)によつた。
- ②③ 不明の歌・分明の歌、ともに防人歌・東歌は狭いである。
- ④ 作者別年代別万葉集の鑑歌数から、他の各々のグループの歌数及び古歌集の歌(64首)を差引いた歌数。
- ⑤ 巻20の98首に巻14の6首を加えた歌数。
- ⑥ 巻14の中から防人歌6首を除いた歌数。
- (註5) 色彩語をもつ防人歌
白(四三四〇・四三七九、四三八九、四四一五)、青(四四〇三)、赤(四四一七)
- (註6) 壬申の乱平定まで(六七二年)
- (註7) 奈良遷都まで(七一〇年)
- (註8) 色彩語をもつ東歌
白(三三六〇、三三六〇)＝或本の歌、三四四九、三四九七、三五一七)、青(三四四三、三五一一、三五二二、三五一九、三五四六)、赤(三五三四、三五三六、三五四〇)、紫(三三〇〇)、丹(三五六〇)、もみち(三四九四)、榛摺(三四三三、三四三三)
五)「小水葱の花摺(三五七六)、まそほ(三五六〇)
- (註9) 大体天平五年から天平宝字三年まで(七五九年)
- (註10) 白(二一九三)、青(八二)、赤(三三四)、紫(一七)、丹(二二)、もみち(一〇六)、榛摺(一)、まそほ(三) 括弧の中は用例数。
- (註11) 大体天平五年まで(七三三年)
- (註12) 「アカン」の項(正宗敦夫・森本治吉編 万葉集大辞典 日本古典全集刊行会 昭和18・6)
- (註13) 柴生田稔「東歌及防人の歌」(万葉集大成10 平凡社 昭和29・5) 三三九～三四〇頁
- (註14) 犬養孝「万葉地理―その風土性―」万葉集大成21 平凡社 昭和30・11) 四六頁
- (註15) 渡藤嘉基「東歌」(国文学解釈と鑑賞41号) 六七頁
- (註16) 西角井正慶「東歌」(国文学解釈と鑑賞215号) 六一頁
- (註17) 森本治吉「万葉集の芸術性」(修文館 昭和17・11) 四六六・四七三頁
- (註18) 森本治吉「あづま歌の風土性」(短歌研究 昭和25・11月号) 八五・八七頁
- (註19) 土橋寛「民謡と文学―東歌を中心として―」(日本文学4巻2号) 一八頁
- (註20) 土橋寛「古代文学における地方と中央―防人歌を中心として―」(国語園文26巻11号) 二二頁
- (註21) 亀井孝「方言文学としての東歌・その言語的背景」(文学 25・9月号) 六七三頁
- (註22) 大久保正「万葉の伝統」(瑞書房 昭和32・11) 二二六・二二八頁
- (註23) 藤森朋夫「東歌序詞の風土性―武蔵国の歌の場合―」(日本文学 8号) 四・六・一頁
- (註24) 上西繁「万葉集東歌の序詞」(研究「神戸大」文学部11号) 五六・八五・八六頁